《正岡子規（36）の続き》その277
子規周辺の人びと（二十七）

平岸　三八

墓碑銘によれば、和漢学を修め、佛典に通ずとある。鎌倉の円覚寺の僧・今北洪川に就いて禅を学び、公案を見事に解いて、天然居士の居士号を老師からあたえられたことをさす。

英文、独語、佛語をも学び、数学にも長じたとある。父が金沢で有名な数学者であったことに通ずるものだろう。論語（魯論）を愛読し、身辺から離さなかった。

省略した部分には、母に事えて孝、日夕膝下に至り、学ぶところを談じて楽しみとしたこと。参禅して悟ったことを、母に語ったので、没したときも母は嘆き悲しむことが甚だしかったが、なお安らかに心を動かすことが少なかったので人々は、練修の効だと云った。

今の学者は古人の書の片言隻句をとって文を成し、自己の胸中に一物もないのに大言壮語しているとし、その空間論を草するに、反覆沈潜し、四年の間、孜々矻々として死に際しても遂に論文を完成することができなかった（猶以稿未成辞）。

米山の変わっていたことのうち、最も有名なのは、一晩かかって試験の答案を書いた逸話であろう。これも森　銑三氏の『天然居士の墓』に載っている。

箕作佳吉教授の博物学の試験に、午後3時の時間一杯に他の学生はすべて答案を出したのに、米山ひとりはまだ書いている。箕作先生は助手に頼んで帰ってしまった。米山は答案を書き続けて、夕方になっても終らぬ。助手も仕方なく小使を連れてきて番をさせて、帰ってしまう。小便には小使がついて行く。便所から帰るとまた依然として書き続ける。小使のことだから催促するわけにもゆかぬ。そのまま夜を明かして、箕作先生が翌朝登校してみると、米山はまだ書き続けているので、先生もあきれて、もうよかろうと云って取り上げたら、米山は平然として寄宿舎に帰ってしまったというのである。

卒業の時もやはりそうで、なかなか卒業論文ができない。いくら催促されても出さない。教授会では落第ときめかかる。それを元良勇次郎教授がなんとか出させて及第だけはできたが、そのために卒業の成績は悪く、米山にはそれが不平だったそうである。

以上は森氏が狩野亨吉氏から聞くところで、狩野氏は米山と大学同級であった。

墓碑銘の最後には、銘曰、鳴乎学士、学博守篤、抱一経通群籍、蘊而不発、発則破的、鳴乎学士矣、而止於学士也とある。

米山天然居士のことは、漱石夫人の『漱石の思い出』の新家庭と題する章にも載っている。但し博物学が歴史の試験と取り違えている。

答案を一晩中かかって書いたこと、漱石の建築家志望を文学者志望に改めさせたこと、天然居士の写真を引き伸ばして半身像を作り、追悼の句を書いたこともすべて載っている。

ここでまたまた、子規の結核を最初に診断した医師の資料を見出したので、記録しておく。今回もそれを手にしたわけではなく、古本屋の目録にあるのを見出したのである。目録を見るのは、なかなか楽しい。

今回の目録は、東京都千代田区一ツ橋二―六―一二　上村ビル一階　古書　街の風　目録第14号（平成19年4月吉日　永森健太発行）の141頁に載っている。

海都満氏解剖図　傷有
原山崎元修模写　603図
明治14年　四〇，〇〇〇

明治9年大学を卒業しているのに、14年になってなおハイツマン（?）の解剖図を六百図も模写しているのだから、なかなかの勉強家であったことが知れる。名前はやはり玄修ではなく元修が正しいようだ。

山崎元修の校補した本や、出版した本については、本稿（二十一）、（二十二）に記述した。